



みかど ひろし 本名・鈴木重太郎。昭和12年、『唄入り観音経』が二百万枚を越える大ヒットで全国に名を売った。昭和38年、個人では浪曲界初の芸術祭奨励賞を受賞。昭和43年に日本浪曲協会会長。昭和54年、勲四等瑞宝章を受賞。十八番は『男の花道』『嘘の母』ほか。レコードを吹き込んだキングレコードの建物の半分は三門博が建てたといわれた。今年10月12日に死去。享年91。上の写真は昭和20年代の後半、浪曲の黄金時代を作った二代目・廣澤虎造（写真、左）、三門博（真ん中）、二代目・玉川勝太郎。浪曲界の顔役たちだ。

師匠と弟子の物語
 師・三門博 弟子・三門お染
 三門柳
 と説いた三門博の素顔
 勸善懲惡や義理と人情の大切さ

文・おさだ衛



昭和36年、芝居の『唄入り観音経』が終わって。主役の西念の三門博と馬子役の、お染。「演技も一流でしたよ。いつもオレが浪曲を教えてやるから家に来いと、いつていたたいって、もうすこし私も行って勉強しておけばよかった」

「唄入り観音経」で一世を風靡した三門博が逝去し日本浪曲協会が協会葬を行なった（本誌4ページ）。博師の浪曲を再評価する声が高まっている。愛弟子に恩師の実像を語ってもらった。
 「私にとっては神様みたいな方で心から尊敬できる方でした。七色の声の伊丹秀子さんと同じで、もう二度と現れない名人ですね」と三門お染。
 現役ではもう一人の弟子が三門柳だ。

す。私以上に先生を敬愛していた姉弟子の美鈴も立ち上がれないほど悲嘆にくれています」

献身的に博師を看護した柳は奥さんや親族の強い勧めで告別式には遺影を持って歩いた。柳には、おそれおおくも晴れがましい「男の花道」ならぬ「女の花道」だった。

三門博は幼年時代に母に死に別れ、父は姿を消して行方不明、住まいも転々として、ひとかたならぬ辛酸を嘗めた。二十歳を過ぎて浪曲師を志すまでに20以上の職業を経験した。

「人にはいえない苦勞の数を克服した先生は邪心がない、素晴らしい人間の持ち主でした」（柳）

貧困と犯罪は密接な関係がある。不遇な少年時代を過ごした三門博は大家となった後も20年以上に渡り全国の刑務所を慰問したり、講演で防犯の大切さを説き青少年の健全育成を願った。

「ですから礼儀ただし方で、弟子がアイサツをしないと、あの大きい目をむいて叱りつけましたよ」（お染）
 芸には厳しい師匠だった。

「芸には妥協しない、なんでもお見通しの師匠で、あるとき、私の舞台の録音を聞いたら、私が着た衣装、手振り身振り、どんな心境で演じたかなどを「浪曲の研究に没頭していて、この世

のことで知らないことはない先生でした。弟子おmoiの方でして、私は声帯が弱くてすぐノドをつぶすんですが、私のために「男の花道」を25分につめて、いただきました」（お染）

博師は鈴木啓之というペンネームで台本を書き、そのほとんどが傑作だ。

「紺屋高尾」を改めて聞くと作品の構成の巧みさ、詞章の新しさ、時代考証の確かさ、ケレン（笑い）の多彩さなど見事な脚色で、「本家」の初代・篠田実に勝るとも劣らない豊穡な物語世界が広がっている。好奇心と挑戦心に満ちた、努力を重ねた天才といつてよい。

「師匠の演題はお客さまの要望でどこでも「唄入り観音経」で、私は後見で毎日さいっていました。ある日、師匠が



昭和52年、東京は阿佐ヶ谷の自宅前にて。右は三門柳。「弟子として38年間つかえました」が、話や教えはいつも新しいものでした」（柳）

私に「おれは毎日、同じように演っているか」と尋ね、未熟な私は「そう聞えます」と答えたら先生は「毎回、違うんだよ」と、いわれました」（柳）

そうして耳をすますと、客層を見てマクラを変えたり難しい言葉の説明をしたり細心が理解できたという。柳はいう。

「私も先生のネタを掛けますが、先生が演じて笑いが来たところで私の場合にはなかなか来ないんです。人間の深さというか芸の力なんです」（お染）

このたびの死去について、歌手の小椋佳や小室等は異口同音に「だみ声の浪曲のイメージを一変させて自分たちの音楽に影響を与えた」と語っていた。「声の良さもありましたが、合い三味



昭和53年、写真は柳、三門菊江（故人）。「蔵書がたくさんあって、先生はいつも浪曲の研究をしていました」（柳）

線の鈴木柳（りゅう）。三門博の義母にあたる名曲師）さんの存在が先生を偉大にしたと思います。二人の稽古は芸のぶつけあい、鬼気迫る真剣勝負でした」（柳）

世間の裏表を知り、困難や苦労を経て到達した三門博の「人間賛歌」のネタは現代でも十分に通用する。

「森羅万象がすべて師匠だ、が口癖だった先生は終の棲家である笠間市の稲田で、奥様の限りなく大きな愛に支えられて幸せでした」（柳）

「今は天国で生前のように浪曲の研究をされているでしょうね」（お染）
二人の愛弟子は取材中、終始、涙を浮かべては師の遺徳を偲んでいた。



お染（左）・柳の三門シスターズ。お染「納棺のとき、先生の冥福と、私も声が出るようにと祈りました」。柳「私には先生の半生を描いた『小仏峠の雪』というネタがあります。鎮魂のためにも早く演りたいのですが、泣いて出来なくなるかもしれませんね」

浪曲... これほどすばらしい芸は他にはないと思います。

44
52

浪曲家の皆さん... 頑張ってください。
多くのファンを楽しませて下さい。

葛飾区・坂本豊吉